個に応じた指導の充実を図る習熟度別指導

■　本県における習熟度別指導の状況

本県では、約９割の小・中学校が習熟度別指導を行っています。習熟度別指導は、習熟の程度が同程度の児童生徒を小集団に編成するため、それぞれの集団に応じた指導方法や内容を工夫することによって、より効率よく、きめ細かな指導が可能となります。

習熟度別指導の実施状況

小学校	92.4%
中学校	88.6%

（H23年度教育課程実施状況調査）

平成23年度指導方法工夫改善に伴う教員配置校実施報告書においては、習熟度別指導等、個に応じた指導の実施により、ほとんどの小・中学校において、児童生徒の「知識が定着し理解が深まった」「学習意欲が高まった」という回答をしています。

習熟度別指導等、きめ細かな指導による効果

項　　目	小学校	中学校
児童生徒の意欲が高まった	98.0%	97.5%
思考力・判断力・表現力が高まった	87.3%	78.2%
教科等に関する技能が身についた	96.0%	89.8%
知識が定着し理解が深まった	96.2%	92.9%

（H23指導方法工夫改善に伴う教員配置校実施報告書）

■　習熟度別指導の実施にあたって

習熟度別指導は、児童生徒の学力実態に基づいて、指導内容を重点化するとともに、学力の程度に応じた指導方法を明確にした指導計画を作成することが大切です。

習熟度別指導のポイント

ポイント1

○　児童生徒の実態に応じて指導内容を重点化しましょう。

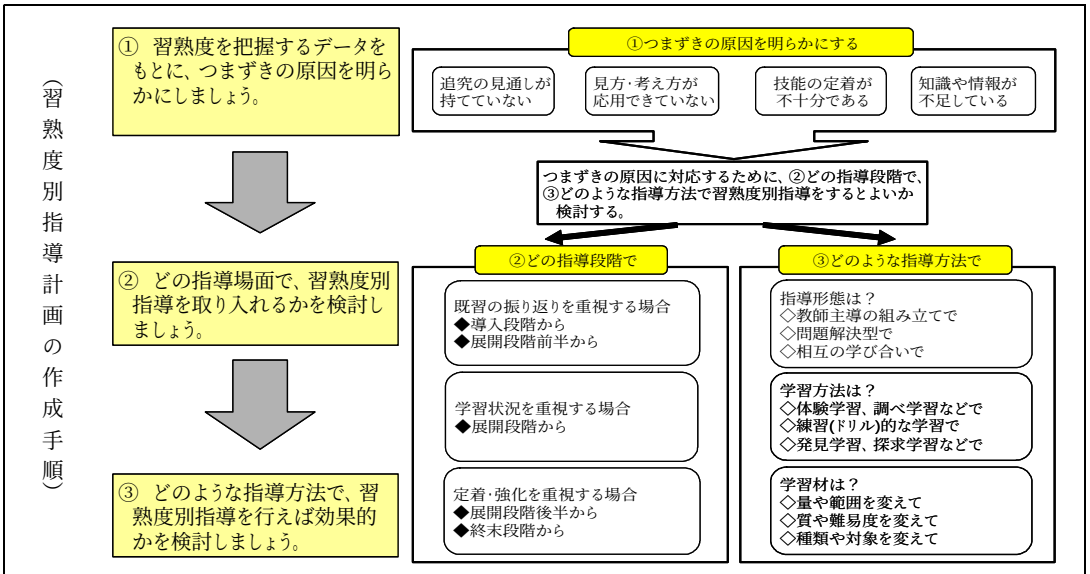
・　各種学力調査や学期末や年度末に行う総括テスト等の結果をもとに、児童生徒の学習内容の習熟の程度を分析し、各学年において重点的に指導する領域や単元を定めることが大切です。

重点化する指導内容や位置付ける指導段階・指導方法を明確にし、校内で共通理解を図りましょう。

ポイント2

○　単元のどの指導段階で、どのような指導方法で習熟度別指導を行うかを明確にした指導計画を作成しましょう。

・　習熟度別指導は、単元全体を通して実施するだけでなく、児童生徒の実態や教材の特質等を考慮し、単元のどの指導段階で、また、どのような指導方法で指導にあたることが学習内容の定着に効果的かを検討し、指導計画を作成することが重要です。



「学習内容の習熟の程度に応じた指導の在り方」　福岡県教育委員会、福岡県教育センターから作成

算数科における習熟度別指導の実際

直方市教育委員会（中泉小学校）

■　取組のねらい

○　少人数で学習を進め、きめ細かく指導にあたることにより、個々の理解を深めさせ、習熟を図る。

■　取組の組織

○　学力向上推進委員会が中心となり、児童の実態を基に本年度の重点取組を決め、各取組の推進体制を整える。

学力向上推進委員会
校長・教頭・主幹・指導教諭
指導方法工夫改善教員・養護教諭・児童支援

本年度の重点取組と推進担当
・少人数学習（学習ボランティア含）の推進【校長・教頭・指導方法工夫改善・ボランティア】
・習熟度別学習の推進【校長・教頭・指導方法工夫改善・主幹・児童支援・各担任・ボランティア】
・家庭学習の推進　【指導方法工夫改善・養護教諭・児童支援・各担任】
・学習規律の徹底　【校長・教頭・主幹・指導方法工夫改善・各担任】

■　取組の年間計画

習熟度別学習の年間計画

時期	習熟度別分割学習の取組 対象学年・・・5年生 推進・・・・校長・教頭・主幹・指導方法工夫改善・児童支援・５年生担任
１学期 １学期末	《取組》 一斉学習の形態で、複数の教員が関わり個別指導を重点的に行い、児童の実態把握と具体的な手立てについてさぐり、２学期からの分割学習に向けての指導体制を整える。 《評価・検証》 ・毎時間後の手立ての検証と児童の実態把握 ・定期テスト・学期末テスト ・教師・児童アンケート ・学力向上推進会議における評価・検証
２学期 ２学期末	《取組》 １学期の評価・検証を基に、分割形態を整え、すべての算数科の単元において分割学習を推進する。 《評価・検証》 ・毎時間後の手立ての検証と児童の実態把握 ・定期テスト・学期末テスト ・教師・児童アンケート ・学力向上推進会議における評価・検証
３学期 ３学期末	《取組》 ２学期の評価・検証を基に、分割形態の改善を行い、すべての算数科の単元において分割学習を推進する。 《評価・検証》 ・毎時間後の手立ての検証と児童の実態把握 ・定期テスト・学年末テスト ・教師・児童アンケート ・学力向上推進会議における評価・検証

■　取組の工夫点

○　丁寧な実態把握

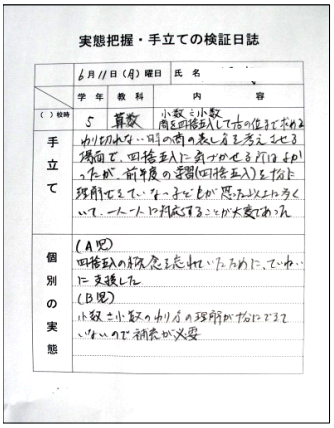
習熟度別学習の推進担当教員が、２学期からの５年生の習熟度別分割学習をより効果的に推進していくことができるように、１学期に時間をかけて５年生の児童の実態把握を行う。

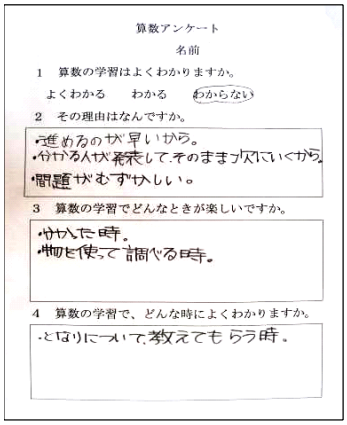
授業終了後、手立ての検証や児童の学習の様子について検証する。

○　個に応じた手立て
　具体物の操作等、個に応じた体験的な活動を多く取り入れる。
○　学習意欲を高める方策
　一対一の対話の時間を多く取り入れたり、自分の考えを発表させたりして児童の頑張りを評価する。

■　取組の実際

○　丁寧な実態把握
　授業終了後、左記に示す検証日誌、アンケート等（資料１）を活用して、児童一人一人の学習内容の定着状況を把握するとともに、課題を明確にした。そして、児童一人一人の習熟の程度に応じ、きめ細かな指導の充実を図ることができるよう、４つのグループを編成して指導にあたった。





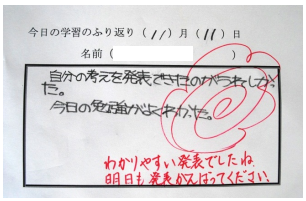
【資料１】検証日誌、算数アンケート

○　個に応じた手立て
　算数が苦手なグループにおいては、授業の中で、特に具体物の操作を行わせる活動を重視して活動を構成し、数や量の概念を実感をもって捉えることができるよう配慮した。（資料２）

○　学習意欲を高める方策
　少人数であるため、一人一人の児童の発言の機会がより多く確保できるというよさを生かして、授業の中で、児童一人一人に自分の考えを説明させたり（資料３）、納得できたかどうか一人一人に確認したりすることを毎時間継続して行った。また、授業の終わりに「振り返りカード」を書かせ、児童の頑張りを評価（資料４）して学習意欲の向上を図った。

【資料２】具体物の操作

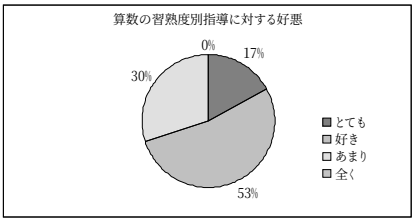
【資料３】考えの説明

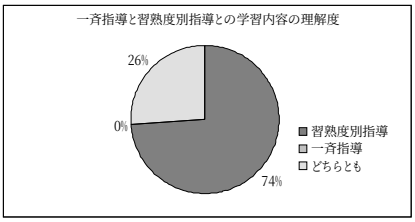


【資料４】振り返りカード

■　取組の成果と課題

○　習熟度別指導後の児童アンケートでは、７割の児童が習熟度別指導を好きと回答している。また、74％の児童が習熟度別指導の方が学習内容が理解できると回答している。
　この結果は、習熟度別分割学習にしたことで、低学力の児童に発言の機会が十分与えられ、教師のきめ細かな指導が充実したことによるものと考える。また、見届けを受けることで、学習意欲が高まったと考える。さらに、算数を苦手とする児童に対して、具体物を操作する活動を重視して活動を構成したことの効果であるとも考える。
　このように習熟度別指導を実施したことは、児童の学習意欲を喚起し、学習内容の理解を図る上で効果的であった。
●　一人一人の児童の実態に合わせて丁寧に学習を進めていくことは効果的ではあるが、各グループの進度をそろえて進めることは、学習内容によっては難しい面もある。





【資料５】アンケート結果

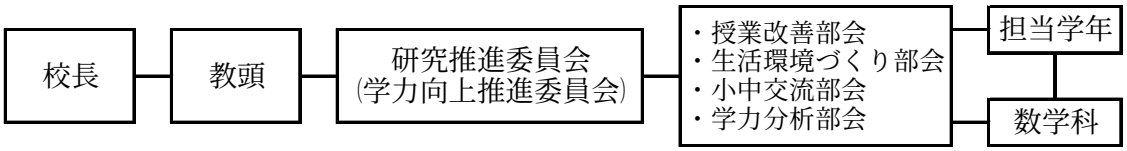
数学科における習熟度別指導の実際

みやこ町教育委員会（豊津中学校）

■　取組のねらい

○　生徒一人ひとりの実態に応じたきめ細かい指導と評価活動の一体化を図るための指導方法の実践研究を通して、生徒の「確かな学力」の向上を目指す。
○　年間計画を立てて取り組む中で、生徒の実態に応じた指導方法を模索する。

■　取組の組織



■　取組の年間計画（第２学年）

	単元	取組内容
1	式の計算	習熟度課題別少人数指導
2	連立方程式	習熟度課題別少人数指導
3	一次関数	習熟度課題別少人数指導
4	図形の調べ方	習熟度別個人コース別学習
5	図形の性質と証明	習熟度別個人コース別学習
6	確率	習熟度課題別指導

○　検証は、授業での記録・感想を確認し、次時に確認テストを行う。
○　学力差が大きく出る単元後半で習熟度別少人数指導を行い、個に応じたきめ細かい指導を行う。特に、復習・定着学習での活用を中心に行う。
○　生徒指導上の課題もあり、２つでは、少人数指導の成果が少ないことが考えられるため、１クラスを３つのグループに分けて行う。

■　取組の工夫点

○　学力向上を組織的・継続的に行うため、研究推進委員会や学力向上推進委員会と連携して、取組を推進する。
○　目的に応じて、繰り返し学習や課題別学習、コース別学習などを取り入れ、１クラスを３つのグループに分けて、きめ細かい取組を行う。
○　習熟度、人間関係、生徒指導上の問題などを考えながら、習熟度別を自己選択だけに任せるのではなく、生徒との話し合いを通して少人数のグループを決める。
○　数学科３名の打ち合わせを密にし、共通理解を図りながら、生徒の実態に応じた計画を立てる。実施後は、必ず、検証を行い、次時の確認テストを参考に次の手立てを考える。
○　学年教師等にも知らせ、生徒への声掛けや励ましなど、頑張ったことを認めてもらい学習意欲を高める。
○　少人数指導後の生徒の自己評価や感想を考察し、魅力ある授業づくりをし、生徒に学習意欲を持たせ、自学自習の力をつけさせる。

■　取組の実際（３グループ編成による習熟度別少人数指導の取組例）

（１）　「三角形の合同の証明」（図形の性質と証明）

○　１クラスを習熟度に応じて３つのグループに分け、難易度の異なる１０個の課題を「穴埋め式」と「すべて記述するもの」の２種類の学習プリントを準備し、自分のペースで取り組んでいく個人別コース別学習を行った。

○　「集中できた」「自分のレベルでできた」「わからないところを復習できた」「先生に聞けて良かった」「勉強しやすかった」「後半が難しかった」など好意的な感想が多く見られ、生徒の９割以上が「よかった」と感じているようである。

（２）　「連立方程式」（連立方程式）

○　１つのクラスを習熟度に応じて、３つのグループに分け、課題別学習に取り組んだ。応用コースは、距離・速さ・時間の問題と割合の問題を中心に、基本コースは、お金、距離・速さ・時間の問題を中心に、基礎コースは、連立方程式の計算とお金の問題を中心に課題を準備した。

○　自分の苦手な内容を解く中で、抵抗なく取り組むことができるようになったという声が多かった。自分で課題を選び、学習できる良さが学習意欲の高揚につながった。

■　取組の成果と課題

○　習熟度別指導を推進し、少人数指導を取り入れたことで、落ち着いた環境の中で授業に集中し、意欲的に取り組むことができた。

○　少人数のため、ＴＴによる一斉のよりもきめ細かい
指導を行うことができた。また、つまずきの場所など、生徒の実態を細かく把握することができた。

○　章末など、反復練習で定着を図ることを目的として　少人数指導を行い、生徒自身が自分のつまずきを自ら　気がつき、克服することができた。

○　自分でグループを選ぶため、個々の生徒は自分の習熟の程度を測る目安になった。

●　常に３グループでの取り組みが望ましいが、学力アップの非常勤講師が他校と掛け持ちであるため、時間割の制約が多く、様々な取組に支障が出ることが多かった。

●　少人数指導を通して、ある程度理解でき、自分の力でやることができるようになっても、定着させるためには家庭学習の充実が必要不可欠である。そのために、キャリア教育や学級活動を充実させると共に、保護者との連携をとりながら取組を進める必要がある。

習得した知識・技能を活用する学習活動

■　本県における児童生徒の活用に関する学力の状況

本県においては、平成２４年度の全国学力・学習状況調査の結果から、小・中学校ともに、主として知識・理解に関するＡ問題に比べ、主として活用に関するＢ問題の平均正答率が低い状況にあります。このことについては、平成１９年度に本調査が始まって以来改善されない状況にあります。

各教科区分の平均正答率（福岡県）

	国語Ａ	国語Ｂ	算数・数学Ａ	算数・数学Ｂ
小学校	80.9%	53.8%	72.9%	57.9%
中学校	74.5%	63.7%	60.1%	47.1%

（H24全国学力・学習状況調査）

小・中学校学習指導要領解説総則編「第１章　総説」では、「確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、これらをバランスを重視する必要がある。」と示しています。

そこで、今後各学校においては、基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習指導及び児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育成する学習指導を充実させることが重要です。

■　習得した知識・技能を活用する学習活動の実施にあたって

習得した知識・技能を活用する学習を充実させ、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育成するには、単元に「活用」する場面を位置付けるとともに、児童生徒が課題解決に向け、習得した知識や技能を駆使するよう、要約、説明、論述等の言語活動を取り入れた指導を充実させることが重要です。

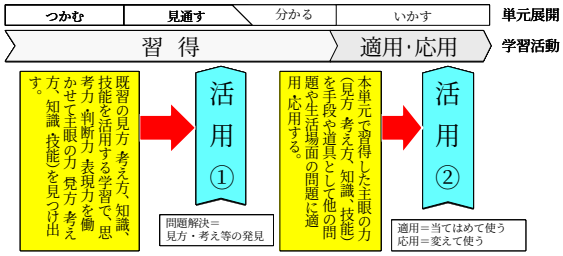
習得した知識・技能を活用する学習指導のポイント

ポイント1

○　単元に知識･技能を「活用」する場面を位置付けましょう。

・　既習の知識・技能を活用する場面は、単元終盤部分に習った知識・技能を別の問題に当てはめて解いたり、学んだ結果をまとめて発表したりする学習場面だけでなく、単元前半部において、前単元までの既習事項を使って本単元の課題を解決する学習場面も考えられます。

【単元における知識･技能を活用する学習活動の位置付け（例）】



・　単元前半での「活用①」で活用させるべき基礎的・基本的な知識・技能とは、主に前単元や前学年で身に付けている「見方・考え方」「知識・技能」であり、既習事項を使って本単元の新しい内容を主体的に発見させるという「活用」の場面です。

・　単元後半での「活用②」は、本単元で身に付けた「見方・考え方」「知識・技能」を「当てはめて使う」「形を変えて使う」という適用的・応用的な「活用」の場面です。

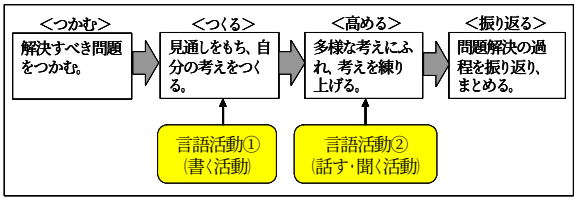
（「小・中・高等学校における『思考力・判断力・表現力』の評価と授業づくり」　福岡県教育センター）

ポイント2

○　各教科等の指導のねらいに応じた言語活動を充実させましょう。

・　言語活動は児童生徒が思考したり判断したりした過程や結果を可視化するとともに、言語として表現することで、明確な考えとして自覚することができます。言語活動にあたっては、目的、内容、方法を明確にし、各教科等の特質に応じた活動を行うことが重要です。

【1単位時間の学習過程での言語活動の位置付け（例）】



・　前半の「言語活動①」では、解決すべき問題に対する自分の考えをつくるための「書く活動」、後半の「言語活動②」では、考えを練り上げるための「話す・聞く」活動を位置付けます。

※　言語活動を位置付ける際、各教科等における言語活動の目的を明確にすることが大切です。
　例えば、算数科においては、「数学的な思考力・表現力を育成する」ために、具体物を用いたり、言葉や数、式、図を用いたりして考え、説明するといった言語活動を位置付けます。

（参考：「思考力・判断力・表現力を高める中学校の授業づくり」　福岡県教育センター）

算数科における習得した知識・技能を活用する指導の実際

広川町教育委員会（中広川小学校）

■　取組のねらい

「円の求積方法」「扇形の見方・考え方」「多角形の内角の和のきまり」を関係づけて思考・判断し、円の色の付いた部分の求積方法を説明（表現）することができるようにする。

■　取組の組織

研究推進委員会（校長、教頭、教務、研究部長、各教科部長、研修部員）

第１部会：授業改善部会

国語部（部長）　社会部（部長）　算数部（部長）　理科部（部長）

習得の授業　活用の授業

【教科部授業研究】
指導案審議→板書研修会→協議会
【同学年部授業研究】
同学年部での授業の提案・追試

成果・課題を研究推進会議へ

第２部会：集中の基盤育成部会

学習規律・環境部	調査・統計部	ドリル内容検討部
（国語部）「学習規律育成内容」や「重点目標が息づく学習環境内容」について提案や実施及び内容の付加・修正。	（算数部）NRT・全国テストの問題分析からの「知識・技能」「思考・判断力」育成の課題についての提案など。	（社会・理科部）「知識・技能の定着」「思考・判断力の育成」をねらいとした問題選択及び提案 ※調査・統計部との連携

成果・課題を研究推進会議へ

※本年度は活用の授業を中心に教科部授業研と同学年部授業研で、組織力を生かした縦（系統性）と横（教科の広がり）で授業力をつけることで子どもの学力向上につなげていく。

■　取組の年間計画（第６学年を例に　☆活用の授業）

	１学期 →	２学期 →	３学期
単元名と活用授業	ア　対称な図形 ☆　自分のマークづくり（A） イ　速さ ☆　流水算（A・C） ウ　分数のわり算 ☆　わり算と割合（B） エ　円の面積 ☆　円の面積と内角の和（B・C） ＜本実践例＞	オ　比 ☆プリンづくり カ　図形の拡大・縮小 ☆　学校の◇の高さを測ろう（A・C） キ　比例・反比例 ☆集めたプルタブの数を求めよう（B・ ク　場合の数 ☆　５人で乗り物に乗ろう	ケ　活用単元 ☆　イラストをぴったりはるには・・・（A・C） ※夏季休業中における算数・数学強化推進事業では全国共通学力検査Ｂ問題を活用した。
活用類型	○　タイプA：見方・考え方の強化・定着のための活用 ○　タイプB：多様性、複合性、スパイラル等を意識した活用 ○　タイプC：事実（問題事象、写真や図やグラフを観察し、見出した事柄を表現） 方法（問題事象からどのように解決すればよいか解決方法について表現） 理由（予想した考えに対して、そう判断した理由について表現）		

■　取組の工夫点

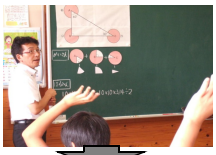
○　三角形の３つの頂点を中心とする同じ大きさの３つの円の、三角形と重なっていない部分の面積の合計を求める問題を、式を読み、その意味を考え、説明する活動を通して、円と扇形の見方・考え方や多角形の内角の和のきまりといった複数の知識を組み合わせて思考・判断する問題として教科書問題を修正する。

○　学習過程を、「直角三角形での追究活動Ⅰ」→「一般三角形での追究活動Ⅱ」→「一般四角形での追究活動Ⅲ」で構成し、式を読んだり、式に表したりする言語活動を通し、思考・判断する場面を意図的に位置づけ、理解を深めながら活用力を高めることができるようにする。

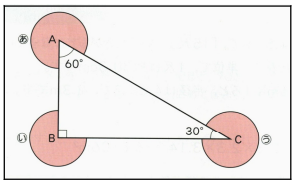
■　取組の実際（第６学年「円の面積の求め方を考えよう」）

１　問題を理解させ、式から求積方法に必要な既習事項を考え、説明するめあてをつかむ。

まず、めいさんはどのように考えたのかな？



扇型の面積をそれぞれの円から引いて・・・



【問題】
左の図のように直角三角形ABCの３つの点を中心とする半径１０㎝の円をかきます。色のついたあ，い，うの部分の面積の合計はどのようにすれば求められるか考えました。
めいさんは次のような方法で求められることを説明しました。
「まず、あの円から中心角60°のおうぎ形の面積を引きます。次に、いの円から中心角90°のおうぎ形の面積を引きます。同じようにうの円から中心角30°のおうぎ形の面積を引きます。最後に、それぞれの面積をたせば求められます。」

それに対してはると君は、次のように説明しました。「めいさんの方法でもできるけど、ぼくはこの方法でもできると思います。」
10×10×3.14×3−10×10×3.14÷2
はると君はどのように考えて求めたのでしょうか。

はるとくんは、どんな考えで式をつくったのかな？

めあて　色のついた面積の合計の求め方を説明できるようになろう。

2　問題文と式表現の意味から求積方法を考え、既習内容をもとに説明することができる。

○*直角三角形で考える問題Ⅰ*

知識・技能

・円の求積方法
・円を半径で切り取った部分（扇　形）で面積を捉える見方・考え方
・三角形の３つの角の和は180°

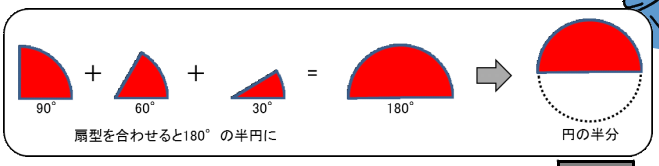
思考方法

類推的思考

演繹的思考

〈式を読み、説明する言語活動Ⅰ〉

まず、３つの円の面積を求めるために10×10×3.14×３をします。
次に、３つのおうぎ形をたしたら180°になるので、これは円の半分の面積になります。
だから、３つの円の面積から円の半分の面積を引くと求められます。
だから式は、10×10×3.14×3－10×10×3.14÷2になります。



○*一般三角形で考える問題Ⅱ*

角度がわからない時は、どうしたらいいだろう？

知識・技能

・どんな三角形でも３つの角の和は180°
・円の求積方法
・扇形の見方・考え方

思考方法

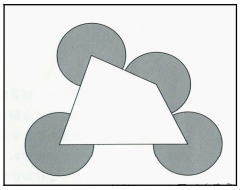
帰納的思考

演繹的思考

〈式を読み、説明する言語活動Ⅱ〉

どんな三角形でも、３つの角をたすと180°になるので、３つのおうぎ形をたすと180°になります。
だから、どんな三角形でも円の半分になるので、式は、10×10×3.14×3－10×10×3.14÷2になります。

○*一般四角形で考える問題Ⅲ*



左のような四角形の４つの頂点を中心とした半径10㎝の円があります。四角形以外の円の部分の面積の合計はどんな式で表されるでしょう。

四角形になったら４つの円の部分の面積は、どんな式で求めたらいいのだろう？

知識・技能

・円の求積方法
・円を半径で切り取った部分（扇型）で面積を捉える見方・考え方
・四角形の４つの角の和は360°

思考方法

演繹的思考

・４つの中心の角を合わせるということは四角形の４つの角の和のことだから…
・どんな四角形でも４つの角の和は360°だから…
・円の面積の公式は…

〈式に表し、説明する言語活動Ⅲ〉

まず、４つすべての面積を求めるから10×10×3.14×４になります。
次に、四角形はどんな四角形でも、４つの角をたすと360°になります。これは、円１つ分の面積になります。
だから、４つの円から１つ分の円を引いて、10×10×3.14×4－10×10×3.14になります。

自力で考える子どもの様子

3　本時学習をまとめる。

円の面積と三角形や四角形の角の和のきまりを使うと求められることが説明できる。

■　取組の成果と課題

○　「円の面積を求める方法」と「多角形の内角の和のきまり」や「扇形の面積の分割合成」などの複数の知識を組み合わせて式を読んだり、式で表したりする問題事象を工夫したことは、子どもの思考・判断・表現力などの活用力を高める上で有効であったと考える。
○　思考・判断したことを図・式・言葉で表現する既習の学び方が本時有効に働いたこと。
●　本時 T・T で行ったが、複数の知識や見方・考え方を組み合わせる思考が不十分な子どもへの個別支援の内容や方法（少人数指導等）をさらに具体的に明確にしていく必要がある。
●　習得で何を習得させるかを吟味して活用につなぐ単元構成をさらに工夫すること。

基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る繰り返し指導

■　本県における基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る繰り返し指導の状況

本県では多くの小・中学校が基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るための繰り返し指導を行っています。例えば、始業前の朝の活動の時間や放課後等を活用し、基礎的な計算力や漢字を読んだり書いたりする力を高める指導等を行っています。しかし、小学校の約１割、中学校の約３割の学校においては、児童生徒の実態に応じ、重点的に指導する内容を定めないままに、繰り返し指導が行っている状況が見られます。児童生徒の基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る繰り返し学習を効果的に行うには、実態分析に基づき指導内容を重点化することが重要です。

平成２４年度小･中学校における繰り返し指導の状況

項　　目	小学校	中学校
重点的に指導する内容を定めて繰り返し指導を行っている	88.6%	67.6%
重点的に指導する内容を定めてはいないが繰り返し指導を行っている	11.0%	27.6%
繰り返し指導を行っていない	0.4%	4.8%

（H24年度学力向上推進に関する調査）

■　繰り返し指導の実施にあたって

基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図るために繰り返し指導を充実させるには、校内の学力向上推進委員会等を中心に、児童生徒の学力実態に基づく指導計画を作成し、全教職員共通理解のもとで組織的に取り組むことが重要です。

繰り返し指導のポイント

ポイント1

○　指導する内容を重点化した計画を立てましょう。

・　各種学力調査や学期末や年度末に行う総括テスト、単元の評価テスト等の結果をもとに、児童生徒の学習内容の習熟の程度を分析し、各学年において重点的に指導する領域や内容を定め、組織的に指導にあたることが大切です。

ポイント2

○　児童生徒一人一人に基礎的･基本的な知識･技能の定着を図ることができるよう指導方法を工夫しましょう。

・　児童生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導を充実させるために、一斉指導に加え、個別指導やグループ別指導等の指導方法を工夫することが大切です。特に、グループ別指導については、習熟の程度に応じて学習集団を編成し指導にあたることが学力向上には効果的です。

【繰り返し指導実施までの流れ】
1　児童生徒の学力実態を把握するための評価テスト問題の内容を検討し、評価テストを実施する。
2　結果分析によって、基礎的・基本的な知識・技能の定着状況を把握する。
3　指導する内容の重点を定め、指導方法や指導体制の改善し、年間指導計画を作成する。
＜指導方法＞
・習熟度別指導、個別指導、グループ別指導等
＜指導体制＞
・ティーム・ティーチング、外部人材の活用等
4　校内研修等で全教職員の共通理解を図り、繰り返し指導等を実施する。

【学力向上推進組織の役割】
◇　評価テストの結果分析
◇　繰り返し指導の指導計画の改善
◇　繰り返し指導実施状況の把握、支援

学校として重点的に指導する内容や児童生徒の一人一人の実態に応じたきめ細かな指導を充実させる指導方法について、校内で共通理解を図りましょう。

基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る繰り返し指導の実際

朝倉市教育委員会（金川小学校）

■　取組のねらい

○　学習内容の確実な理解と学習意欲の向上
○　児童の学習実態を把握（短期的・中期的）し、それを生かした学習指導法の工夫

■　取組の組織

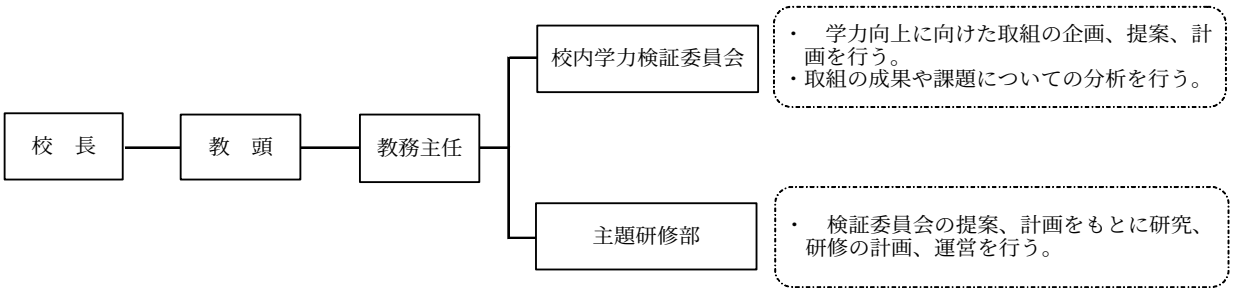


図　取組の組織図

■　取組の年間計画

学期	１学期	２学期	３学期
計画	４月：学力向上に向けた取組の提案 ５月：H23年度の標準学力テストの分析をもとに課題の共有化 ５月：主題研究における提案授業（３年生） ６月：研究授業（４年生） ８月：１学期の取組に関する成果と課題の分析と２学期の取組に関する見直し ８月：小テストの作成や算数オリンピックの問題作成	９月：２学期の計画提案 10月：研究授業（２年生） （５年生） 11月：研究授業（６年生） 12月：研究授業（１年生） 12月：２学期の取組に関する成果と課題の分析と３学期の取組に関する見直し 12月：算数オリンピックの問題作成と修正	１月：３学期の計画提案 ２月：主題研究のまとめ （講師招聘） ３月：学習オリンピックの実施 ３月：次年度の学力向上に向けての計画作成

■　取組の工夫点

○　校内学力検証委員会と主題研修部を組織し、取組の企画提案と取組の推進を分担して計画・実施・評価・改善を行う。
○　児童の実態を短期的・中期的に把握しながら、その実態に応じた取組を進める。
○　研究授業の事前研修（模擬授業）に講師を招聘し、実践的な授業改善を行う。

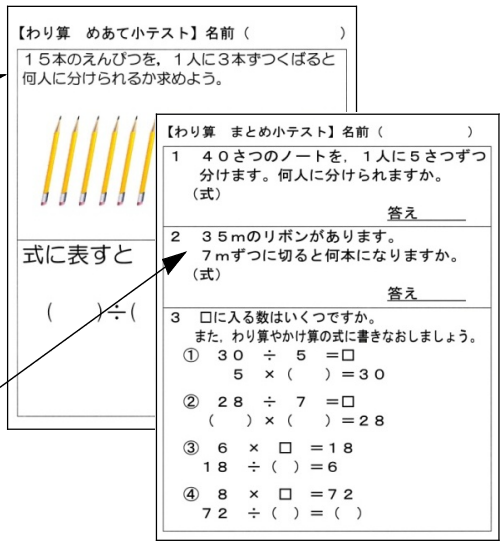
■　取組の実際

１　小テストを取り入れた授業づくりについて（短期的な繰り返し）
各単元の学習内容によって、小テストを単元のどこに位置づけ、どのような内容で、どの

程度の量を行えば、学習内容の定着度が把握でき、学習内容の確実な定着、習熟につながるかの工夫を行った。

○　小テスト取り入れた授業について
＜実践例：第３学年　算数科「わり算」（５／９）＞

学　習　活　動
1　前時までの学習を「めあて小テスト」で振り返り、本時学習のめあてをつかむ。 ・　いくつ分になるかを求めるわり算の学習について「めあて小テスト」で振り返る。 2　本時の問題について、いろいろな方法を用いて答えを見つける。 3　どの方法が、速く簡単に答えを見つけられるかについて意見を出し合う。 4　本時学習をまとめ、練習問題を行う。 ・　いくつ分かを求めるわり算について「まとめ小テスト」で振り返り、練習をする。



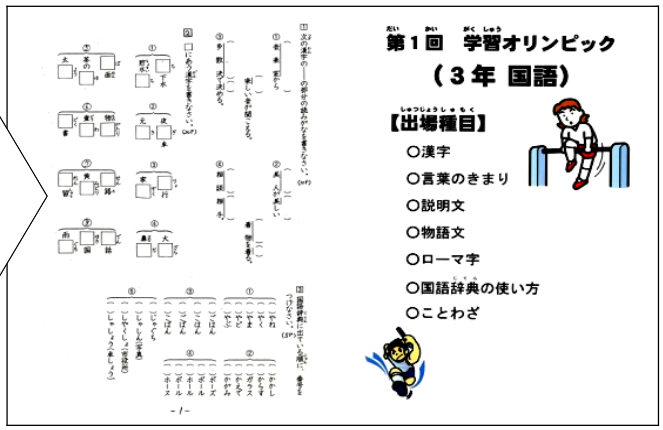
○　小テストの種類について

ふりかえり小テスト	めあて小テスト	まとめ小テスト	チャレンジ小テスト
単元に関係する既習内容の理解度をはかる小テスト	本時の内容をつかむ。前時の学習内容との違いに気づかせる小テスト	本時の学習内容についての理解度をはかる小テスト	単元の学習内容の理解度をはかる小テスト

2　学習オリンピックの取組について（中期的な繰り返し）
昨年までの算数科を中心とした「算数オリンピック」の取組の成果を、他教科へと広げるために「学習オリンピック」を設定し、日常の取組の成果を確かめる場として実施した。
（1）「学習オリンピック」実施計画
○　実施回数：年間５回で行う。（１・２学期各２回、３学期１回）
○　実施時間：算数マスタータイムや予備時数から２時間程度を使う。
○　実施教科：国・算・社・理で実施する。（低学年は国・算）
（2）「学習オリンピック」の実施内容について
○　問題は基礎問題・活用問題で構成し、Ａ３用紙２枚（両面印刷）程度の量で作成した。
○　児童には２週間前に実施単元を知らせ、朝のタイムでの学習オリンピック練習週間、生徒指導部の家庭学習週間と関連させ、学習オリンピックに向けての自主的な活動を行った。

【学習オリンピックの作成問題例】

１学期は５月下旬と７月上旬に、２学期は１０月下旬と１２月中旬に、３学期は３月上旬に実施し、中期的な児童の学習状況や課題を把握し、それからの学習指導に生かすようにした。



■　取組の成果と課題

○　児童の生活アンケートの結果から「楽しく学校に来ている」が５％、「意欲的に学習している」が５％、それぞれ１学期よりポイントが上がった。
○　担任が児童の実態を細かく把握することができ、個別指導に生かすことができた。
●　児童の個別の学習実態に応じた問題の作成、修正
●　小テスト、学習オリンピックの問題作成の効率化

基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る繰り返し指導の実際

飯塚市教育委員会（頴田中学校）

■　取組のねらい

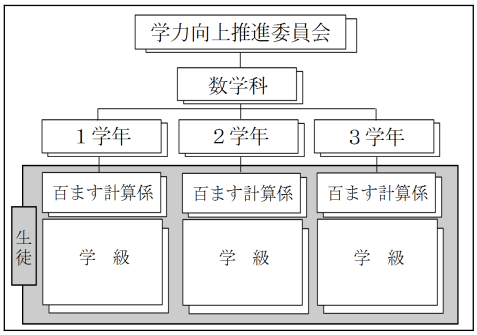
○　学習に対する意欲の向上を図る。
○　家庭学習の定着と基礎的･基本的な知識･技能の定着を図る。

■　取組の組織

本校では、学力向上に向けた効果的な指導方法を実施するため、校長・教頭・教務・進路指導・研究主任・総合学習・指導方法工夫改善による学力向上推進委員会を組織し、具体的な計画・実施・検証を行っている。

繰り返し指導については、「学力向上推進委員会」でねらいや方向性を検討し、具体的な方法や運営は数学科が行っている。

また、各学級には生徒による「百ます計算係」を設置し、係と数学科教員が連携しながら、全ての生徒たちが主体的に取り組めるようにした。



繰り返し学習の組織図

■　取組の年間計画

取組を始める準備として、７月にチェックテストを実施し、生徒の実態把握を行った。また、８月には全職員で共通理解を図るため、職員会議や職員研修を実施し、目的や意義、実施方法の説明を行った。

２学期から、繰り返し指導の取組として、「百ます計算」「短時間集中型反復テキスト」を下記のように行った。

「百ます計算」…朝の自習時間に実施

「短時間集中型反復テキスト」…家庭学習の課題として実施

また、計算コンクールやチェックテスト、アンケート調査を定期的に行うことで、取組の進捗状況が把握できるようにした。

【 年間活動計画 】

	全　体	百ます計算	短時間集中型反復
7月	◇チェックテスト		
8月	○職員会議 ○職員研修	夏休みの課題	
9月	○取組開始	朝学習 【8:35～8:45】	家庭学習 【自学ノート】
１０月	○◇アンケート		
１１月	○計算コンクール		
１２月	○◇アンケート		冬休みの課題
1月	○チェックテスト	朝学習 【8:35～8:45】	家庭学習 【自学ノート】
2月	○計算コンクール		
3月	○◇アンケート		

◇生徒　○教師

平成24年度年間活動計画

■　取組の工夫点

○　職員の協働意識を高めるために
- 　職員会議や職員研修を通して、目的や意義・実施方法について全職員で共通理解を図る。
- 　各学級の取組の内容や成果を全教師で共有できるように「百ます通信」を作成し、週末毎に全教師に配布する。
- 　日々の記録を入力したファイルを、いつでも職員が確認し利用できるようにする。
- 　定期的に職員アンケートを実施し、その意見を取組方法や内容の改善に積極的に取り入れる。

○　取組への意欲を向上させるために
- 　生徒の自主性を促すために各学級に「百ます計算係」を設置し、係を中心に取り組む。
- 　定期的に計算コンクールを実施し、上位者は記録を発表し全校集会で表彰する。
- 　個人の記録用紙で毎日の記録をグラフ化させ、自身の成長を確認したり翌日の取組に目標を設定しやすようにする。

■　取組の実際

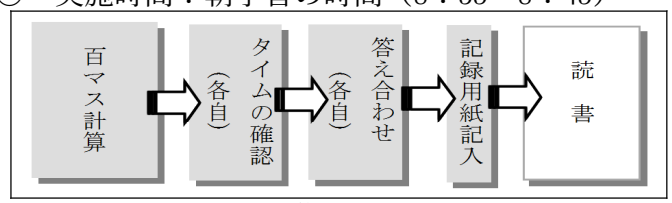
１　「百ます計算」の取組の内容

「百ます計算」は、算数・数学の基礎的・基本的な知識・技能である四則演算の力を伸ばすだけではなく、学習への自信や達成感を得たりすることができる取組である。そのため本校の生徒の課題である次の力を育て、学習に対する意欲の向上を図ることを目的として取り組んだ。

・しっかりと課題に向き合うことのできる集中力や忍耐力 ・１時間目の授業から意欲的に取り組むことのできる姿勢と意欲

（１）　実施方法

○　実施時間：朝学習の時間（8：35～8：45）



朝学習の流れ

「百ます計算」の様子

○　取組の確認事項

①　目標を持たせる（問題を配付したら、目標タイムを記入させる）。
②　自己評価をさせる（毎日記録用紙の記入を行い、前日の記録と比較して自己評価させる）。
③　毎日実施する（中間考査や期末考査の日も実施する）。
④　時間内に問題を解くことができなかった生徒は、解けるところまで問題を解き、記録は時間ではなく解いた問題数を記録させる（他人と勝負するわけではない）。

○　日々の記録の集計

・　毎日、記録用紙に記録を書き込み、自分の成長を確かめる。
・　学級の記録の集計は、「百ます係」が中心となり毎日行う。

２　「短時間集中型反復テキスト」の取組の内容

「短時間集中型反復テキスト」は、次のことを目的として取り組んだ。

・　テキストを用いて振り返り学習を繰り返し行うことで、数学の基礎的・基本的な知識・技能を身につけさせる
・　家庭学習の課題として計画的に取り組ませることで、家庭学習の習慣の定着を図る。

（１）　実施方法

○　火・金曜日の週２回、１単元(２ページ)を家庭学習の課題として取り組ませ担任に提出。
○　未提出者に対しては、昼休みや放課後の時間に取り組ませるなど個別指導を行う。

３　「計算コンクール」の実施

取組を長期にわたって行うためには、メリハリをつけ生徒の意欲を高めながら行うことが大切である。そこで、学校総体で取り組んでいる利点を生かし、定期的に「計算コンクール」を実施した。この取組は、日頃取り組んでいる「百ます計算」の成果を発表する機会として実施し、上位者や目標達成人数の割合が高い学級は全校集会で表彰を行った。さらに、係を中心に取り組ませることで、生徒の自主性を育て意欲の向上を目指した。

４　「百ます計算」平均記録の推移

右表は、各課題初日の平均記録(全校)を基準に、毎日の平均記録(全校)を減少率で表したものである。

課題①では８日後の減少率が9.5%であったが、課題⑤では８日後の減少率が34.0%と課題が変わる毎に時間短縮が進んでいることがわかる。このようなことから、「百ます計算」は毎回課題を変えるのではなく、毎日取り組ませることこそが重要であり、そうすることで四則演算の力が身についていくことがわかる。

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目
課題① 足し算	0.0%	4.3%	4.8%	3.2%	7.3%	8.5%	10.1%	9.5%
課題② ひき算	0.0%	3.8%	7.1%	5.8%	10.9%	8.5%	12.4%	13.0%
課題③ かけ算	0.0%	4.2%	5.2%	10.0%	10.4%	10.0%	10.3%	14.3%
課題④ わり算A	0.0%	2.8%	7.1%	9.9%	12.8%	18.1%	19.3%	21.3%
課題⑤ わり算B	0.0%	11.8%	20.0%	24.8%	28.7%	26.7%	33.9%	34.0%
……								

わり算A:余りのないわり算　わり算B:余りのあるわり算

「百ます計算」平均記録の減少率推移表（全校）

■　取組の成果と課題

○　「百ます計算」に毎日取り組ませることは、数学の基礎学力を身につけさせる上で有効であった。さらに、アンケート調査から「数学の授業がわかるようになり、楽しくなった」と多くの生徒が答えており、学習意欲の向上を図ることができた。
○　６月と11月に実施した生活実態調査の結果、家庭学習の時間が平均で20%ほどのびており、「短時間集中型反復テキスト」の取組が、家庭学習の定着に効果をもたらしているといえる。
○　朝の時間を活用して「百ます計算」に取り組ませることで、１時間目の授業から集中して取り組める生徒が増加した。
●　学年の実態や生徒個々の実態に合わせた取組が行えるよう、きめ細やかな指導ができるよう工夫・改善を行う必要がある。

学習習慣形成のための家庭学習

■　本県における児童生徒の家庭学習の状況

全国学力・学習状況調査の結果から、平日に１時間以上、家庭学習を行っている児童生徒の割合は、平成１９年度に比べ、小学校でやや増加していますが、中学校では同程度です。一方、平日全く家庭学習を行っていない児童生徒の割合は、小学校で同程度、中学校でやや減少しています。

児童生徒の平日の家庭学習時間

	小学校		中学校	
	１時間以上	全くしない	１時間以上	全くしない
H24	57.3%	4.4%	60.5%	9.5%
H19	53.9%	4.6%	60.4%	12.3%

（全国学力・学習状況調査「児童生徒質問紙」）

家庭学習の内容

	小学校	中学校
授業の復習	45.9%	41.7%
授業の予習	36.1%	25.5%

（H24全国学力・学習状況調査「児童生徒質問紙」）

また、家庭学習の内容として、学力向上に効果的と考えられる「授業の復習」を行っている児童生徒の割合については、小・中学校ともに半数未満の状況にあります。

■　各学校における家庭学習の指導について

家庭学習の指導にあたっては、家庭学習時間や家庭学習の手順の指導だけでなく、本単元で習得した基礎的・基本的な知識・技能のより確実な定着を図ったり、次の単元における知識・技能の習得に必要となる既習の知識・技能の想起を図ったりするなど、家庭学習の内容とと日常の授業の内容との関連を持たせることが大切です。

家庭学習の指導ポイント

ポイント1

○　家庭学習と日常の授業の関連を持たせましょう。

・　家庭学習の指導にあたっては、「本単元の学習内容の復習」や「次の単元における知識・技能の習得に必要となる既習事項の復習」など、授業の復習を重視し、日常の授業との関連をもたせることが大切です。

家庭学習と日常の授業との関連の例

【本単元の学習内容の復習】

＜授業＞
【学習内容】
(例)　小学校第３学年
「たし算とひき算の筆算」
・十の位と百の位に繰り下がり（2回）がある筆算の仕方の学習

→

＜家庭学習＞
【家庭学習課題】
(例)　・繰り下がりが１回の筆算練習（繰り下がりにつまずきがあれば復習問題）
・繰り下がりがりが２回の筆算練習

→

＜授業＞
【学習内容】
(例)　・十の位が空位の場合の筆算の仕方の学習

【次の単元における知識･技能の習得に必要となる既習事項の復習】

＜家庭学習＞
【家庭学習課題】
(例)　・三角形、四角形等の面積、直方体、立方体の体積の求積の練習

→

＜授業＞
【学習内容】
(例)　第６学年
「立体の体積」
・四角柱、三角柱等角柱の体積の求積

ポイント2

○　児童生徒の実態に応じ、個別の課題を克服する家庭学習を行わせましょう。

・　家庭学習が児童生徒にとって主体的なものとなるためには、児童生徒自ら家庭学習の計画を立てて行わせるようにすることが大切です。その際、学年・学級としての共通の課題だけでなく、自らの弱点克服を図るための個別の課題に基づく学習内容を計画的に行わせることが重要です。
・　個別の課題の提示にあたっては、単元内での形成的評価、単元のテスト、学期末テスト等を基に、児童生徒一人一人の学力実態を明確にし、特に、その児童生徒に特に定着が必要と考えられる内容を重点化することが大切です。

家庭学習習慣定着の取組の実際

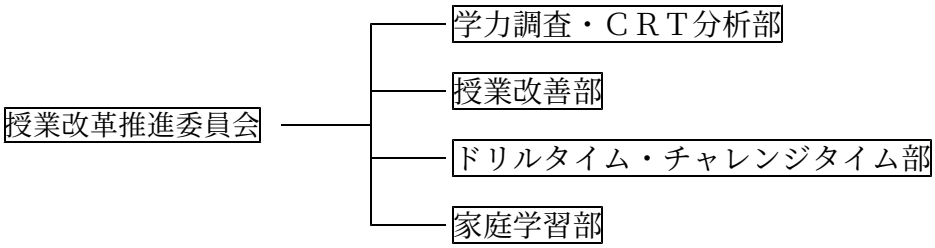
鞍手町教育委員会

■　取組のねらい

○　学校と家庭が連携した取組を行っていくことにより、家庭学習習慣の定着を図っていく。
○　10分×学年(１年生は20分)の家庭学習時間の目標を設け、週に５日以上する子どもの割合を80%以上とする。

■　取組の組織

○　授業改革推進委員会が中心となり、家庭学習の手引き作成や職員研修の計画、取組の点検を行い、共通の取組や改善点を職員全体に周知する。



■　取組の年間計画

月	取組内容
4	「家庭学習のすすめ」(町統一)、「家庭学習の手引き」(学校ごと)配付、説明
5・12	家庭学習アンケート調査実施、検証（家庭学習の定着度、取組の改善点）
7・10・1	家庭学習定着のための強調週間の設定、実施
7・12	職員研修（家庭学習の取組交流）　随時…授業改革推進委員会
2	検証委員会の開催（取組の成果と課題、次年度の方向性）
3	中学入学前家庭学習（町統一のワーク）の実施

■　取組の工夫点

○　家庭訪問、懇談会等を通した家庭学習の取組についての啓発
○　職員研修（家庭学習についての共通理解、学級の取組交流）
○　強調週間におけるがんばりカード（子どもの自己評価と家庭の取組集約）
○　教育力向上県民運動との連動（学校と家庭との連携）
○　小中連携による自主学習ノートの取組

■　取組の実際

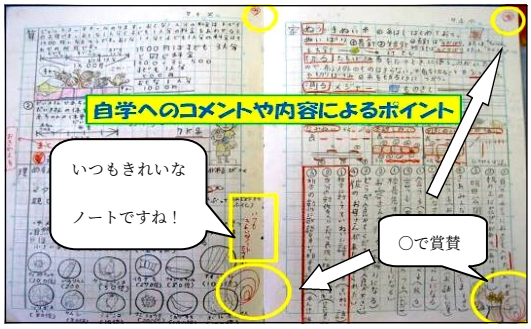
[小学校]
○　学年ごとの家庭学習の内容、時間、目的

学　年		１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生
内容	宿　題	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	自　学				○	◎	◎
目標時間		20分	20分	30分	40分	50分	60分
目　的		宿題の習慣形成	宿題の習慣定着	宿題の習慣定着　&自学の入門	宿題の習慣定着　&自学の形成	自学の定着	自学の発展

◎・・必須の取り組み（毎日）　　○・・必須の取組ではない

○　子どもの意欲を引き出すための点検、評価
- 　がんばりカードやシールの活用
- 　個に応じた宿題プリント
- 　自学へのコメントやポイント
- 　自学レストラン（参考になる自学の紹介）
- 　子ども自身による自学の計画

○　家庭との連携
- 　学校や家庭での取組交流（通信、懇談会）
- 　「家庭学習のすすめ」を活用した保護者の学年に応じた関わりづくり推進
- 　教育力向上県民運動と連動させた取組の充実（学期ごとの強調週間、がんばりカード）



児童の自学ノート

[中学校]

○　自主学習ノートの取組
- 　毎日、家庭学習で大学ノート１ページ以上
- 　毎日、担任が点検し、できてない生徒は、昼休みや放課後を使って学習
- 　お互い生徒のノートの良いところを交流
- 　小学校と連携して、小学生の時から継続実施

○　スキルアップタイムの取組（英・数の基礎課題テスト）
- 　学力向上委員会で計画・立案を行い、職員会議で全教職員の共通理解のもと、年間10時間程度、週時程の中で全教師で実施
- 　実施２週間前までに英・数のテスト課題を与え、自主学習ノートを使って家庭学習
- 　数学は基礎ドリル、英語は単語プリントを使用し、自主学習ノート(家庭学習)で学習
- 　１時間の前半を数学テスト(40問程度)、後半を英語テスト(単語80問)で実施・採点をし、80％に達成しない生徒は、昼休みや放課後を活用して、補充学習・再テストの実施及びアンケートを活用しての改善

スキルアップタイムの様子

【スキルアップタイム実施後のアンケート結果】

		1年				2年				3年			
スキルアップタイムで、数学の基礎的な力（計算力）が以前より身についたと思いますか？	評定尺度	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
	%	6.1	24.2	57.6	12.1	4.55	54.5	36.4	4.55	0	21.9	53.1	25
	平　均	2.2				2.6				2.0			
スキルアップタイムで、英語の基礎的な力（単語、文法）が以前より身についたと思いますか？		1年				2年				3年			
	評定尺度	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
	%	9.1	33.3	42.4	15.2	0	36.4	36.4	27.3	0	28.1	50	21.9
	平　均	2.4				2.1				2.1			
スキルアップタイムの時間は、集中して取り組めましたか？		1年				2年				3年			
	評定尺度	はい		いいえ		はい		いいえ		はい		いいえ	
	%	90.9		9.1		95.5		4.5		90.6		9.4	

■　取組の成果と課題

○　小学校においては、家庭学習の目標時間達成率が、５月84%、12月91%となっており、ほとんどの児童が家庭学習習慣の定着が図られてきた。

○　中学校においては、低学力層の生徒のつまずきがある程度確認でき、補充学習や自学ノートで課題を与え、生徒の理解と学習に対する興味･関心も高まってきた。

○　学力向上に向けた取組を行うことで、教師の家庭学習課題の与え方などに関する意識に変容が見られるようになった。

●　定期的に授業改革推進委員会(小学校)、学力向上委員会（中学校）を開催しているが、児童生徒の課題を明確にし、実態に応じた内容にする必要がある。

●　学年の発達段階や個人差に応じた宿題の内容や、子どもたちが主体的に家庭学習に取り組んでいくための更なる工夫をしていかなければならない。

●　あらゆる機会をとらえて家庭学習の必要性や内容等を啓発していくことにより、多くの家庭の協力が得られるようになってきたものの、家庭学習の意義や行い方等について、まだ十分理解されていない家庭もあるので、引き続き取組の啓発を行っていく必要がある。

家庭学習習慣形成の取組の実際

久留米市教育委員会

■　取組のねらい

本市における全国学力・学習状況調査の平均正答率及び市学力実態調査における得点率と到達度は全国平均値をやや下回っているのが現状である。その重要な要因の１つとして、家庭学習習慣が定着していないことが考えられている。

平成23年度久留米市学力実態調査で実施したアンケートの結果によれば、平日授業以外にほとんど勉強しないと回答した小学校５年生7.6%、中学校２年生25.3%でいずれも全国平均値（図書文化社調べ）を上回っている。

そこで、授業改善とともに児童生徒に家庭学習習慣を形成させることで本市（本推進校区）の学力向上を目指した。

■　取組の組織

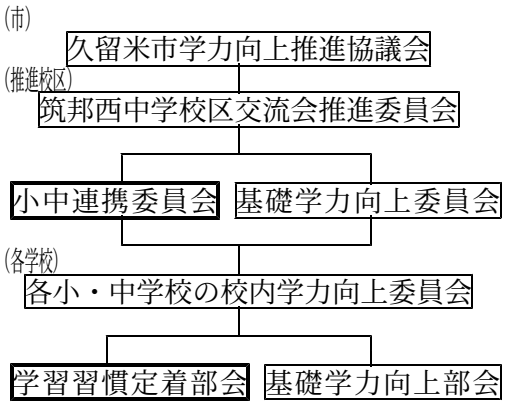
１　久留米市の組織

久留米市学力向上推進協議会（学識経験者、推進校区校長会代表、保護者代表、地域代表、小・中学校長会代表、教育事務所、市教委事務局から構成）を設置し、推進校区の報告を受け、指導助言を行うとともに、市内各学校への取組の拡大を行っている。

２　推進校区（筑邦西中学校区）の組織

推進校区として指定された筑邦西中学校区は、筑邦西中学校区交流会推進委員会内に設置した小中連携委員会と基礎学力向上委員会で小・中学校が連携しながら取組の方向・内容・方法を確認し、それを受けて各学校の学力向上委員会とそれぞれの部会で事業の推進を行っている。特に、学習習慣形成には、小中連携委員会と校内の学習習慣定着部会が担当している。

【筑邦西中学校区学力向上組織図】



■　取組の年間計画

【年間実施計画】（主な家庭学習習慣形成の取組に関するもののみ）

月	取組内容（筑：筑邦西中、安：安武小、大：大善寺小）
4	筑：「家庭学習手引き」の配布、「毎日の生活・学習ノート」の配布（１年生） 大：「家庭学習のポイント」、「家庭学習の進め方」の児童への説明・指導
5	安：「家庭学習の手引き」の配布と PTA 総会での事業説明 大：家庭訪問で「家庭学習のポイント」を保護者に配布・説明
6	筑：家庭学習習慣に関する校内研修
7	筑：「家庭学習の手引き」利用状況の把握と家庭向けリーフレットの作成配布 大：取組の成果と課題検討、取組の成果と課題の検討
8	筑：学力向上校内研修会の実施 安・大：改善策の検討
9	大：学校版「家庭学習の手引き」の検討
10	大：学校版「家庭学習の手引き」の完成と保護者への配布検討
11	３校：久留米市版「全国学力調査の結果のお知らせ」保護者用チラシの配布と学校だよりによる保護者啓発 大：大善寺小版「家庭学習の手引き」の配布と第１回家庭学習強化週間の実施
12	大：家庭学習をテーマにした土曜懇談会の実施
1	安・大：家庭学習に関するアンケート
2	大：第２回家庭学習強化週間の実施 ３校：久留米市版「久留米市学力調査の結果のお知らせ」保護者用チラシの配布と学校だよりによる保護者啓発
3	３校：取組のまとめ

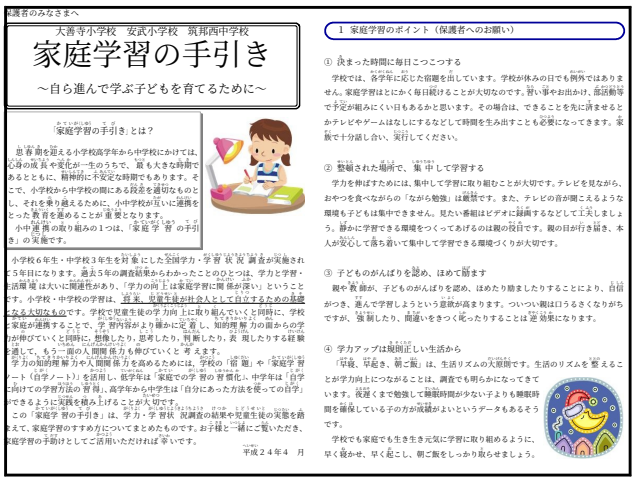
■　取組の工夫点

1　学校間の連携
2　家庭学習の方法・内容の具体化
3　保護者の家庭学習への意識改善

■　取組の実際

1　学校間の連携の取組

昨年度より検討してきた、筑邦西中学校区共通の「家庭学習の手引き」を３校の全児童生徒及び保護者に配布するとともに、ＰＴＡ総会、保護者会、家庭訪問等あらゆる機会に家庭学習の重要性を啓発し、児童生徒への指導を行った。（資料１）


保護者のみなさまへ

大善寺小学校　安武小学校　筑邦西中学校

家庭学習の手引き

～自ら進んで学ぶ子どもを育てるために～

「家庭学習の手引き」とは？

1 家庭学習のポイント（保護者へのお願い）

資料１　筑邦西中学校区家庭学習の手引き

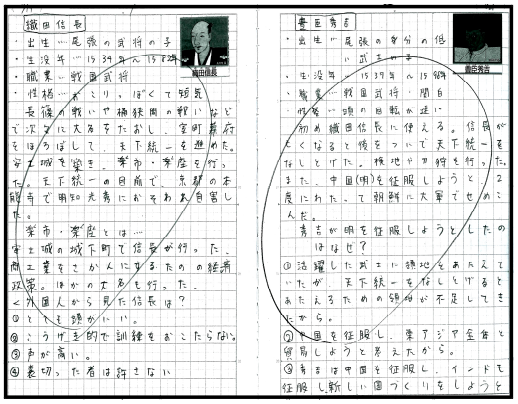
2　家庭学習の方法・内容を具体化する取組

（１）　小学校

各学校の実態及び発達段階を考慮し、各小学校では低・中・高学年に対応した取組を実施した。

大善寺小学校では、学校版「家庭学習の手引き」を低・中・高学年向けにそれぞれに作成し、学年ごとに具体的な学習内容・方法を児童・保護者に示した。

安武小学校では、低・中学年は発達段階に応じた課題を学校独自で作成し取り組ませた。高学年は、中学校に向けて自学ノートをつくり（資料２）、自ら課題を設定して取り組ませた。いずれの学年も教師による点検と取組の賞賛のコメントを入れた。


織田信長

豊臣秀吉

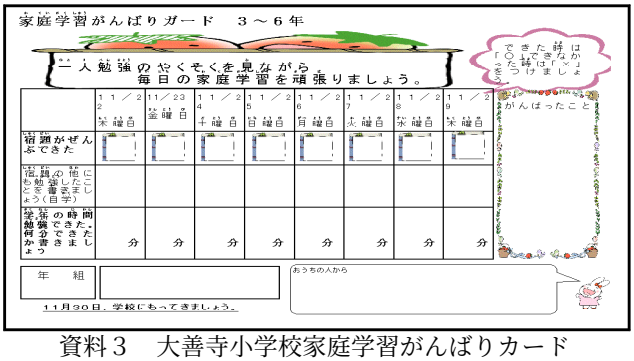
資料２　安武小学校自学ノート

（２）　中学校

筑邦西中学校では、各教科で化される宿題の他、「毎日の生活・学習ノート」を作成し、毎日のドリル的学習と週末のチャレンジ学習（自主学習）に取り組ませ、担任教師が毎日コメントを入れることで、生徒の家庭学習習慣の定着を図った。

3　保護者の家庭学習への意識改善を図る取組

「家庭学習の手引き」の配布と説明で保護者への啓発に加えて、大善寺小学校では、児童への家庭学習の意識化と保護者の家庭学習への意識改革を図るために、「家庭学習のポイント（一人勉強）」を配布し具体的な時間等についてお願いをした上で、11月と２月に家庭学習強化週間を設定した。その際、「家庭学習がんばりカード」（資料３）を配布し、１週間の毎日の取組を児童に記入させるとともに、保護者のコメント欄を設けることで、子どもの学習内容を把握したり、がんばりに気付いたりすることができた。また、取組については集約した結果を保護者に配布することで、保護者の家庭学習に対する意識を高めることができた。


家庭学習がんばりカード　３～６年

一人勉強のやくそくを見ながら
毎日の家庭学習を頑張りましょう。

資料３　大善寺小学校家庭学習がんばりカード

■　取組の成果と課題

○　家庭でほとんど学習しないと回答する児童生徒が市平均、小学校５年7.5%、中学校２年18.5%に減少し、学習時間に改善が見られた。（H24年12月実施久留米市学力実態調査）

●　高学年児童や生徒の自学への充実を図る資料提示などの工夫が必要

●　家庭学習強化週間後の意識を継続させる工夫が必要

家庭学習習慣形成のための取組の実際

福智町教育委員会（金田小学校）

■　取組のねらい

○　学習した内容をその日に復習することで、学習したことを身につける。
○　毎日続けることで、家庭学習を習慣化する。
○　学校と家庭が連携することで学習内容を確かに定着させる。

■　取組の組織

福智町教育委員会
←学力向上検証委員会　学力アップ推進校の具体的な取組について話し合う。
町教育力向上推進委員会　教育力向上の具体的な取組の決定
【重点】・家庭学習の取組
・チェック問題の取組
・生活カードの取組
小・中学校教務主任部会　推進委員会の方策について具体的な取組内容、日程等の決定
各小・中学校研究部等　各学校で取組の推進

■　取組の年間計画

５月	町教育力向上推進委員会	手引き作成の共通理解
各小中学校で「家庭学習の手引き」作成		
７月	町教育力向上推進委員会	学力向上に向けた取組（１学期）の成果と課題
８月	町教育力向上推進委員会 教務主任部会	家庭学習の手引きの交流及びチェック問題の作成
11 月	町教育力向上推進委員会	全国学力・学習状況調査結果について
各小中学校で２学期の学力向上についての成果と課題		
各小中学校で本年度学力向上の取組の総括		
３月	町教育力向上推進員会	本年度総括

■　取組の工夫点

○　町内全小中学校で家庭学習の手引きを作成及び配布
○　小・中学校の連携
○　家庭に啓発（小学校は保護者用と児童用作成、懇談会等で説明）
○　自学の取組の推進（自学内容の例の提示）
○　教職員の共通理解を図るための校内研修
○　取組の成果と課題を学期末に実施

■　取組の実際

1　家庭学習の手引きの作成

福智町の生活カードの取組及び学級の宿題の提出等から家庭学習が十分できていないことが明らかとなった。そこで、保護者用と児童用の家庭学習の手引きを作成した。内容は、「家庭学習の大切さ」、「お願い」、「家庭学習の時間」、「家庭学習の内容」である。

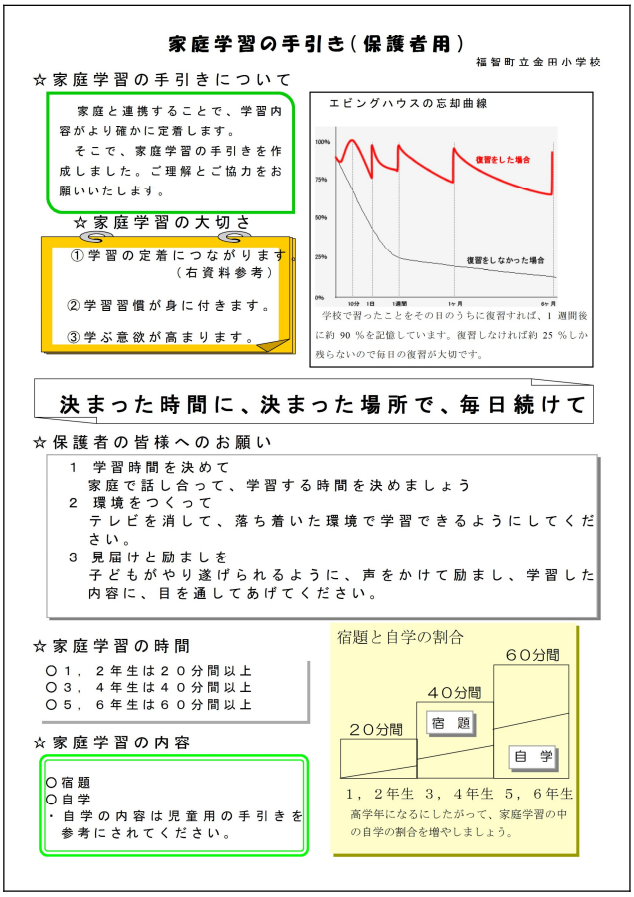
作成にあたっては、研究推進部で原案をつくり、低・中・高学年部会で話し合いをするとともに、福岡県教育庁筑豊教育事務所指導主事に校内研修で家庭学習の手引きについて指導していただいた。

作成した家庭学習の手引きは、全家庭及び全児童に配布した。保護者には懇談会で説明を行い、児童には配布の際に担任から説明を行って家庭学習の徹底を図った。

2　具体的な取組

家庭学習の手引きには、各学年の学習時間と学習内容を示している。学習時間は低学年20分間以上、中学年40分間以上、高学年60分間以上である。内容は、高学年になるにしたがって、宿題よりも自学の割合を増やすようにしている。自学の内容は手引きの中に提示しているが、それだけでは児童には理解はできないので、教師が何をどのようにするのかを具体的に説明を行うようにした。さらに、教室や廊下に見本となるノートを掲示することにより、児童の見本となるようにした。

保護者には「決まった時間に、決まった場所で、毎日続けて」ということで協力を依頼している。

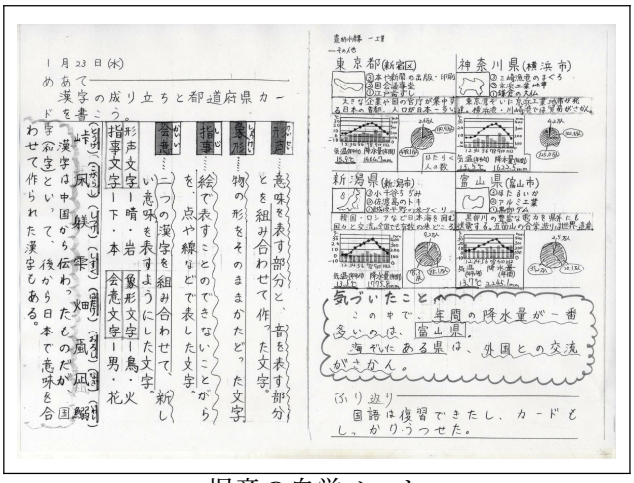


金田小学校家庭学習の手引き（保護者用）

自学の内容

国語	算数
・漢字練習 ・視写 ・日記・作文・暗唱 ・音読・速読 ・言葉の意味調べ ・俳句、短歌、詩づくり など	・教科書や算数ドリルの問題 ・百マス計算 ・音声計算 ・次の日の予習 など
テストの課題をもう一度解く	

提示した自学の内容一部



児童の自学ノート

■　取組の成果と課題

○　計画的に家庭学習を行う児童が増えてきて基礎学力の定着につながっている。

○　自学の取組が充実してきている。また、意欲的に取り組む児童が増えてきた。

○　児童に目標が生まれ、自主的に学習する姿が見られるようになった。

●　家庭学習をしない児童が固定化しているので、家庭との連携が必要である。

平成２４年度ふくおか学力アップ推進事業

■　学力向上推進強化市町村

○　福岡教育事務所管内
　　須恵町、志免町

○　北九州教育事務所管内
　　直方市、小竹町、鞍手町

○　北筑後教育事務所管内
　　久留米市、朝倉市

○　南筑後教育事務所管内
　　広川町

○　筑豊教育事務所管内
　　飯塚市、田川市、福智町、桂川町

○　京築教育事務所管内
　　みやこ町、上毛町、築上町